
発明少年才人のデビュー

よつん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

発明少年才人のデビュー

【NZコード】

N6481A

【作者名】

よつつん

【あらすじ】

おじいちゃんは発明家の小暮才人が、おじいちゃんが残した発明の書を見ていろいろな発明をしていく。さて、どんな発明を才人はするのかな。

第一話 オ人最初の発明＜1＞

僕の名前は小暮才人 好きな言葉は「元氣」のいたつて普通の小学生だ。

友達はいっぱいいるし、楽しい小学校生活を送つていて。スポーツが大好きで家に閉じこもつてられるか！みたいなタイプだ。話は飛ぶけど今日は大好きな休日だ。何が大好きかと云うと、おじいちゃんの部屋に行くのが楽しいんだ。

なぜそんなことが楽しいかって？ 実は僕のおじいちゃん発明家だったんだ。

どうして過去形なの？と思つでしょ。実はおじいちゃん去年死んじやつたんだよね。

おじいちゃんは僕をとてもかわいがつてくれていて僕もおじいちゃんが好きだった。

だから、あの時はとても悲しかつたけど今ではすっかり克服している。それで、どうして部屋に行くのが楽しいのかといつと、おじいちゃんの部屋にはいっぱい発明品が置いてあるんだ。勝手に動く人形とか、ページが勝手にめくれる本とかね。

それで、僕はおじいちゃんの部屋に行つてそういう発明品を見つけては仕組みを見てみたりするんだ。

そして、今日は僕が決めた、月一回の整理整頓の日、僕が遊ぶと、ぐちゃぐちゃになるから、戻したり古いのを取り出したりするんだ。そして、今日、第一回目の整理整頓の日。まず奥に入つているものを取り出して並べる。

それで、つまらそうな物から一番奥に入れる。その時だった。ペラッ、ペラッ

紙がめくれるような音がした。僕は奥を見る。

そこには、本が入つていた。

「なんだ？これ。」

本の上に埃がたまっている。

パツパツと埃をとる。表紙には『マル秘、誰も見てはいけないぞ。』と書いてある。しかし、見てはいけないといわれると見たくなるのが好奇心、本のページをペラットめくると、『バーク何も書いてないよ～。』

なんだ、何も書いてないのか。と思つてまたしまおつとしたその時。キラツと何かが光つた。

それをよく見ようと顔を近づけると鍵だつた。

何に使う鍵なんだろうとよく周りを見てみるとなんと本に鍵穴があつた。一応鍵を入れてまわしてみると、

・・・・・ガチャ！なんと開いた。紙かと思つたものは箱だつたんだ。一枚目は本物だつたけどその後は1つの箱だ。

そして中には小さいメモ帳のようなものが入つていた。

僕はそのメモ帳の中身を見てみた。すると、紙がヒラヒラと落ちた。僕はその紙を見てみた。その紙には

『これを見ている君は多分子供だらう。いや絶対子供だらう。もし大人ならバークとからかわれた時点でいたずらだと思つて捨てると思うからな。

さて、お前が才人かどうかは知らんが、もし違うならこれは元に戻してほしい。もし、これが悪いやつの手に渡つたら悪用されるからな。

お前が才人だとしたら、この本はお前に託す。お前ならこれで悪戯などしないと思うからな。

ここまでいえばわかつたと思うがこれは私の発明を書いたものだ。この本は必ず同じように保管してくれ。

それと、私の部屋は自由に使つていい。今までも、勝手に私の部屋に入つていたからこれも見つかつたんだしな。

さつきも書いたが必ず大人には渡してはならんぞ。才人以外のやつなら絶対戻しなさい。分かつたか？

と書いてあつた。

第一話 オ人最初の発明＜2＞

僕は迷つてしまつた。もし大人までこれをもつてたとしたら悪用するかもしれないからだ。

でもおじいちゃんは僕を信用してくれてこれを使つてくれつていつたんだから使わなかつたら呪われてしまつだろ。」

僕はいいことを思いつけなかつたがそのときが来たら考えればいいと思つて

とりあえず、メモ帳を開いてみた。そこには犬みたいなロボットや、携帯の形をしたものがあつた。

どれも材料がいっぱいあって作り方も難しそうだつた。

一応俺のうちはあきやすい性格なのでそんなに心配しなくても多分材料は大丈夫だと思つ。

最初に何を作らうか迷つてゐると、お母さんが入つてきた。僕は急いで後ろにメモ帳を隠した。

「な、何なの？お母さん。」

「友達が来たわよ。」

「あつ、そうなの。わかつたすぐ行くよ。あつ、そうだ。お母さんいらない鉄くずとかもらつてもいい？」

「それはいいけど。なんに使うの？」

「いやつ、なんでもないよ。後、この部屋僕が使つていい？」

「おじいちゃんも死んじゃつたし・・・・。まあ使つてもいいわよ。」

「やつた！ありがとう。」

よかつた。とりあえずまあ、これで発明の用意はできるだろ。そしたらまたお母さんが言つた。

「どういたしまして、それで、オ人、お前おじいちゃんの代わりに発明しようつて思つてるんじゃないわよね？」
「うつ、するどい！－とりあえず『ごまかさなければ』

「あ、あがつよー。どうしてそんなこと聞くの？」

「いや、ここにせいろころ発明品があるからそれをまねして、お前が作つたりして、失敗したらすまじいことになつてしまつからね。」

「そんなこと考えてないよー。第一、仕組みを見よつと分解して壊れたらもうダメじゃん。」

「それはそつなんだけね、なんか怪しいんだよね。」

「だからそんなことないって。」

僕はドアのほうに押しながらドアを閉めてしまった。
ふう。これでひとまず安心だ。

わざと、メモ帳はどこに隠せばいいだろつか。まあここがどこかと
こいつとせめつあつしておこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6481a/>

発明少年才人のデビュー

2010年10月11日12時26分発行